

現 地 見 学 会 資 料



平成19年10月11日

芦屋市 現地見学ルート

芦屋市役所

12:40頃 出発

ページ



【解説のポイント】
天井川と芦屋川トンネル・・・など

1

桜橋周辺



【解説のポイント】
阪神大水害、桜橋の橋脚、細雪の碑、芦屋川決壊の地
桜並木、潮見桜 猿丸安時頌徳碑 水車臼・・・など

2

開森橋周辺



ヨドコウ
迎賓館

【解説のポイント】
ライトの設計 会下山遺跡 鷹尾城
高座の滝、ロックガーデン 城山堰堤
グリーンベルト・・・など

5



【解説のポイント】
月若公園 業平橋 黒松並木 ぬえ塚 小出櫓重
富田碎花 西国街道 親王塚古墳 朝日ヶ丘遺跡
六麓荘・・・など

8

芦屋神社
周辺

【解説のポイント】
芦屋神社の歴史 だんじり 八十塚古墳
伝猿丸太夫宝塔 アカマツ、ツツジ
水神社とフカ切り岩・・・など

13



【解説のポイント】
開発と治水、水と産業、水にまつわる伝承と信仰
芦有道路 ナウマン象の化石
奥池と猿丸安時、現在の奥池貯水池、奥山浄水場・・・など

15

東六甲
展望台

【解説のポイント】
奥池の植物や野鳥、イモリ池周辺の植生や生き物
人間灯台 大坂城の石垣 六甲変動（平坦面）・・・など

21



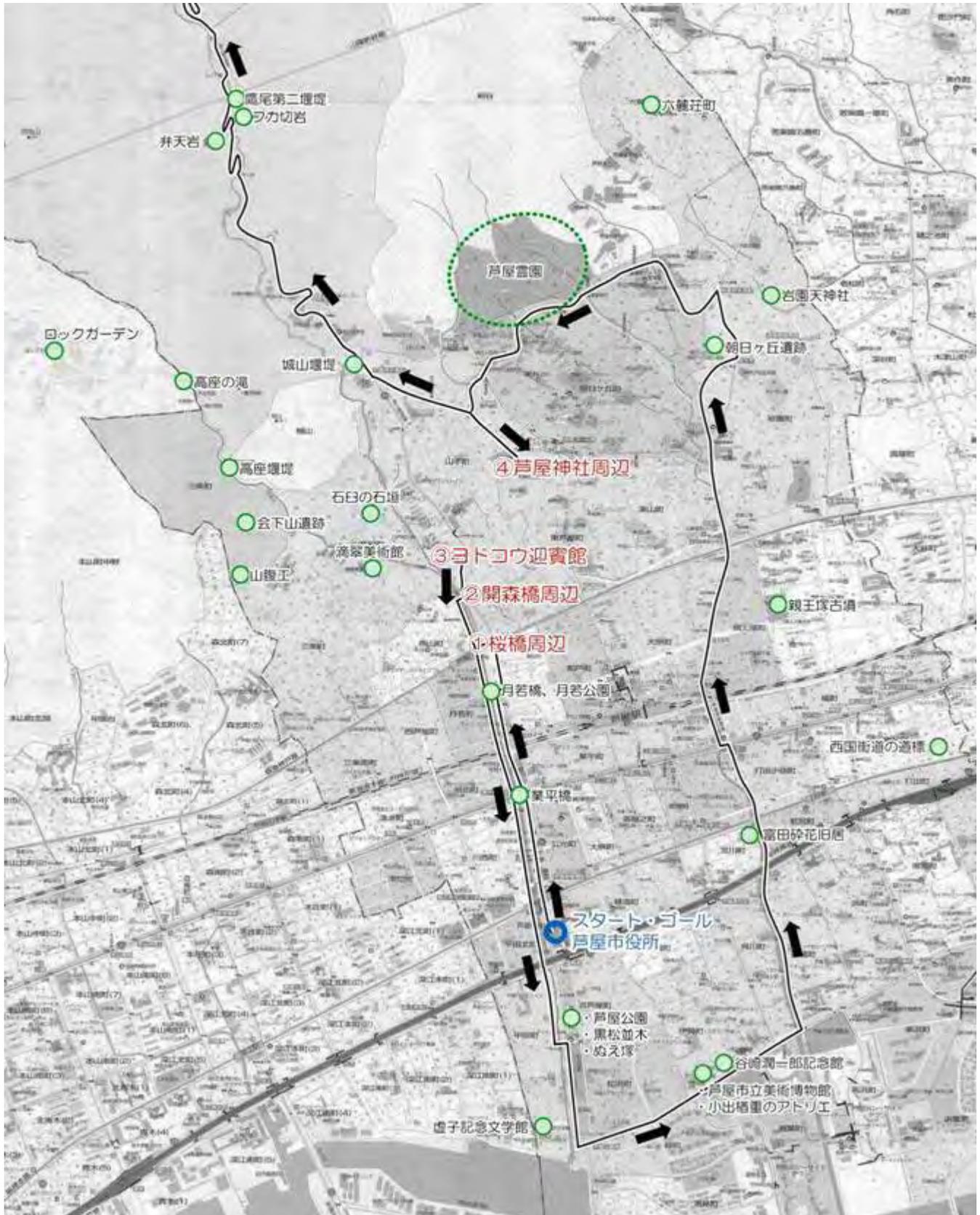
その他補足解説、質問など

芦屋市役所

15:00頃 解散

芦屋市 現地見学ルート図

奥池方面へ



芦屋市役所 ~ 桜橋周辺

【天井川と芦屋川トンネル】

・かつての芦屋川トンネル



芦屋川トンネルを乗り越えて走る汽車。後編の1つは1900年、先編の1つは1901年に撮影された。



す

すこいよすこい
JR 天井川をくぐり抜け

芦屋川は中上流が風化した花崗岩で崩れやすく、大雨のたびに大量の土砂を流して扇状地を形成し、天井川となつていきます。鉄道建設にさいし住吉川、石屋川とともに川底トンネルを採用。工事で困つたのは大量の伏流水が湧き出ること、二年半かかつて明治六年に完成しました。イギリスの新開は挿絵入りで称賛しています。大阪と神戸間の鉄道開通は明治七年で、日本初の鉄道・新橋と品川間開通の二年後でした。

・現在の芦屋川と芦屋川トンネル



桜橋周辺 ~ 開森橋周辺

【阪神大水害・桜橋の橋脚・細雪の碑】



阪神大水害による芦屋市の被害状況



阪神大水害当時の桜橋の橋脚



右岸（阪神大水害以前の石積）



左岸（改修後の石積）



細雪の碑



芦屋川決壊の地を示す碑

け
 絢爛と
 芦屋舞台に「細雪」
 芦屋を舞台にした谷崎潤一郎の名作「細雪」は、昭和十一年〜十六年春までの日本の主な出来事が背景となっていますが、特に昭和十三年七月五日の阪神大水害による芦屋川の氾濫の場面や人々の心理などが巧みに描かれ全篇中の圧巻となっています。谷崎潤一郎は昭和九年から約二年間、宮川町に住み「現代語訳源氏物語」などを執筆しました。開森橋東詰には昭和六十一年四月に生誕百年を記念して「細雪」碑がつけられています。

【桜並木・潮見桜】



芦屋川の桜並木



芦屋川と桜

あ 芦屋川
桜ふぶきは 絵巻のごとく
芦屋川沿いの桜並木は、市の観光協会が中心となり、市民の拠金によって、昭和二十二年三月から一年がかりで植栽されました。その後、補植され今日のみごとな桜並木になりました。このあたりは谷崎潤一郎の名作「細雪」の舞台でもあります。左岸の松ノ内緑地には桜にちなむ在原業平の歌碑などもあり、「業平さくら通り」の愛称とともに、芦屋の春を彩る代表的な風景となっています。

潮見さくら



潮見さくら 70年ほど前の風景

開森橋の東、山手幼稚園の北側に、潮見桜と書かれた木の柱があり、そばに「したれ桜」が植えられています。「潮見」というのは、むかし西山町あたりから芦屋の沖を見ると、とおく東の和歌山県のあたりからあたたかい黒潮が流れてくるのが見えたからたといわれています。

潮見桜は、むかし西山町付近に植えられて有名な木に成長していたそうです。およそ二百五十年前の本に芦屋の潮見桜がえがかれています。百二十年前には、開森橋の西側にあった芦屋小学校の（いまの精進小学校のもと）の校庭に二本の桜が植えられています。京都の「きおんさくら」のように美し

く咲き、芦屋の潮見桜は、そのころの新開や芦屋川駅の案内にも出されました。いまの潮見桜は、このような歴史のある桜を育てるために植えつがれたものです。また、業平橋から開森橋上流までの桜並木は、春の満開のころには、多くの家族づれでにぎわいますが、この桜は、昭和二十年、つまり四十八年前に市民の寄付で植えられたものです。

【猿丸安時頌徳碑】



猿丸安時頌徳碑

◀
 苦勞して
 奥池拓いた 猿丸安時

戦国から江戸前期の大開拓で、芦屋川から三つの井堰を造って取水したため争いが絶えず、江戸末期にはひそかに住吉川から土管（樋）で芦屋川に水を引き「土樋割」紛争がおこりました。芦屋村の猿丸安時を中心に芦屋川上流にため池を二十年かけて造ったことが、奥池水神社と開森橋東詰の「猿丸安時頌徳碑」に刻まれています。昭和三十六年に芦有道路が開通すると奥池遊園地が開かれ、本場のハワイアンで賑わったものです。

【水車臼】



民家の石臼の石垣

ㄣ
 古老の語る
 水車谷 芦屋の里の精米所

阪急芦屋川駅、開森橋と芦屋川西岸をいくと、たぐさんの水車臼をはめ込んだ石垣、ついで川原（水車谷）の奥に水車跡があります。江戸時代には燈油用の菜種や酒米をつくために、上流から木の樋で水を引き水車を回して、たぐさんの臼をついた工場が多数つくられました。働きに来た丹波の若者を追ってきた娘の悲恋民話「金兵衛車やけ車」も生まれました。その後、蒸気機関・石油発動機・電力の新動力に、とって替わられたのです。

ヨドコウ迎賓館

【ライトの設計】



旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）



屋上からの眺め（市街地）

ら
ライトの設計
緑にとけこむ 旧山邑家住宅

国の重要文化財に指定されている旧山邑家住宅（現在淀川製鋼所迎賓館）は、大正時代に山邑太左衛門が、帝国ホテル建設のため来日中のアメリカの建築家、フランク・ロイド・ライトに原設計を依頼し、大正十三年に竣工したといわれています。建物は、芦屋川の南斜面の自然地形を利用した鉄筋コンクリート造り四階建てで各階に大谷石が多用され、幾何学的な彫刻も見られます。震災後も保存修理が施され公開されています。

【会下山遺跡】

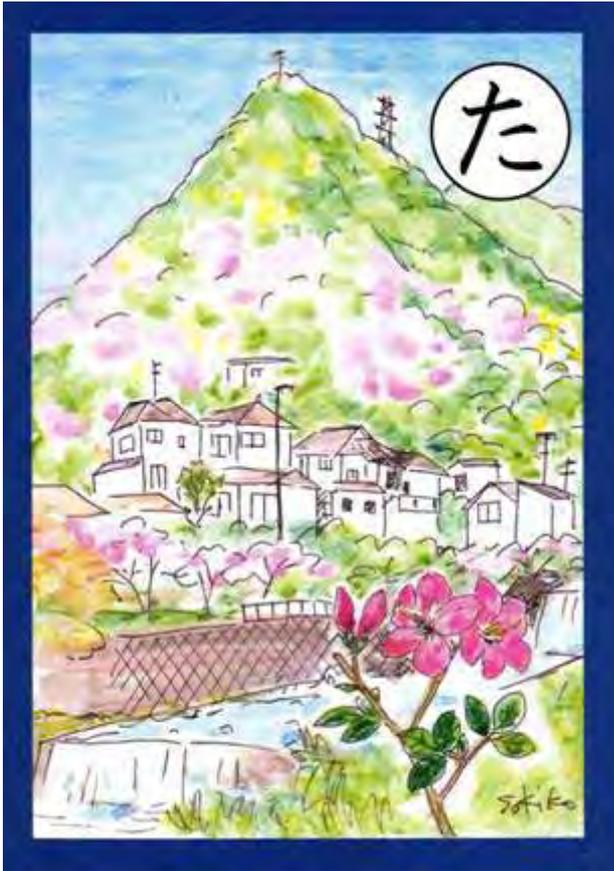


会下山遺跡

え
会下山で
弥生の人が
いくさに備え

急斜面の会下山の尾根から竪穴式住居群・食料倉庫・生活用具が発掘されました。この高地集落が瀬戸内海沿岸を中心に無数にあり、水田耕作の弥生人が山の上に住んでいたのか謎でした。土器の分類で中期と後期に住んだことがわかり、中国の史書にある千九百年前の二回の「倭国乱れ互いに攻め合う」を想像させます。「その後諸国は卑弥呼を王とした」つまり会下山遺跡は統一への大戦争に備えた城と考えられます。狼煙跡もありました。

【鷹尾城】



た 鷹尾城
松若丸いやす コバノミツバツツジ

城山頂上近くの鷹尾城は、戦国初期豊島の瓦林政頼が西阪神地方を支配しようとして築いた城です。地侍を降した政頼は越水城を築き本城とし、降参した河島兵庫介を厚遇し、息子松若を側近くに仕えさせました。これに不満な鷹尾城の中で兵庫介を討ち取る計画があることを知った松若は父に知らせようと鷹尾城へ急いだが、時すでに遅く松若も捕えられ、利発すぎると自害させられました。城山では市花のコバノミツバツツジが見られます。

【高座の滝・ロックガーデン】



高座の滝



ロックガーデン

む おかし修験者 今ハイカー

高座の滝から ロックガーデンへ

芦屋ロックガーデンへの登山口にあたる高座の滝は、高さが十メートル以上の夫婦滝です。むかしは、このあたりは修験者の道場だったといわれています。滝の近くのお堂の裏に不動尊がまつられています。また、滝の上流の斜面から鎌倉時代の灯明皿や瓦器など祭祀性の遺物も見つかっています。滝の近くに、ロッククライミングクラブ発祥（一九二四年）に努められた藤木九三翁のレリーフがあります。

【国の直轄による砂防事業】

- ・昭和13年の阪神大水害を契機に、国の直轄による六甲山系の砂防事業が始まり、芦屋市においても、直ちに城山堰堤や高座堰堤などの整備に着手しています。



城山堰堤（昭和16年竣工）

- ・平成7年の兵庫県南部地震により、六甲山地の各地で腹崩壊が起きました。地震で緩んだ地盤は、土砂災害の危険性が高くなっています。
- ・そのため、六甲山系、斜面全体の安全性を高め、あわせて良好な都市環境の創出を目指す「**六甲山系グリーンベルト整備事業**」にも取り組んでいます。



グリーンベルト対象区域



グリーンベルト整備事業の様子

【月若公園】



三代句碑



虚子記念文学館

つ 月若公園
句碑に見る 虚子三代

芦屋観光協会は創立三十周年を記念して、芦屋ゆかりの俳人・高浜虚子と子息の高浜年尾、孫の稲畑汀子三氏の「三代句碑」の建立を計画し、月若公園に昭和五十五年四月に完成しました。石碑は、芦屋川上流から約十トンの桜御影石を運び、芦屋川の桜にちなんだ三人の句が刻まれました。碑の近くにはオオシマザクラが植えられています。

【業平橋】



業平橋を通る国道電車（昭和初期）



現在の業平橋

お 王朝ロマン
想いをはせる 業平橋に公光橋

伊勢物語は在原業平の和歌を中心につくった恋や旅の歌物語です。芦屋から友人と布引の滝見物帰りの夕暮れに詠んだ「晴るる夜の星か川辺の螢かもわが住むかたの海人のたく火か」は都の人々に芦屋の夜の美しいイメージをあたえ、芦屋の星・螢・漁火の和歌が詠まれました。業平は「體貌閑麗」「きよげなる形」の好男子でした。公光は伊勢物語を愛読し、業平の霊から后との恋の秘事を教わった芦屋の若者です。（謡曲「雲林院」）

【黒松並木】



黒松並木

も
 もとより名高なだかい
 黒松並木くろまつなみき 今いまもなお
 芦屋市あしやしを代表する市木しきクロマツは、かつて芦屋浜あしやのハマをき
 わだたせる松並木まつなみきとして、江戸時代えどじだいの名所めいしょ絵図えずにも生き
 生きと描えがかれていいます。その名残なごりが芦屋公園あしやこうえんの松林まつばやしとし
 て残のこされています。芦屋浜あしやのハマも日本にほんを代表する白砂青松はくさせいしょうの
 名勝地めいしょうちであったのでしよう。乾燥かんそうや潮風しおかぜに強つよく、六甲山ろくこうさん
 から流れ出した花崗岩質かこうがんしつの砂地すなちに耐たえてよく生育せいよくします。
 木肌きはだが黒くろいのと姿すがたが太おとく立派りっぱなので雄松おまつとも呼よばれて
 います。芦屋川あしやがわ沿いにも黒松並木くろまつなみきが見みられます。

【ぬえ塚】



ぬえ塚

ぬ
 ぬえ塚ぬえづかに
 都荒みやこあらした怪物かいぶつが
 ぬえは頭あたまがサル、体からだはタヌキ、手足てあしはトラ、尾おはヘビ
 という怪物かいぶつで、「平家物語へいけものがたり」には源頼政みなもとのもりまさのぬえ退治たいじが近
 衛天皇えてんのう(一一四一〜五五年)のときと、二条天皇にじやうてんのう(一一
 五八〜六五年)のときと二度描えがかれています。京都きょうとから
 芦屋あしやの浜ハマに流れ着ついた死骸しがいを丁重ていじゆうに葬ほうつたというぬえ塚
 は、「摂津名所図会せつづなみしょずえ」に「鶴塚つるづか 芦屋川あしやがわ、住吉川すみよしがわの間に
 あり。今いまさだかならず」とありましたが、現在げんざいのぬえ塚橋づかばし
 近くちかにある碑ひは後代こうだいにつくられたものです。

【小出櫓重】



芦屋市立美術博物館



小出櫓重
アトリエ

め 「めでたき風景」と
小出櫓重 芦屋を描く

近代洋画史に大きな足跡を残した小出櫓重の代表的な随筆に「めでたき風景」（一九三〇年、創元社）があります。その中の「芦屋風景」では、山と海がせまる白砂青松の芦屋の自然を南仏ニースの軟らかい色調と対比したり、身近な風俗習慣などを、画材を探求する画家のすゝめらしい視点でユーモアをまじえて描かれています。小出櫓重が愛した川西町のアトリエは、芦屋市立美術博物館の前身に復元されています。

【富田碎花】



富田碎花旧居

の 野の花を
一本ささげる 碎花さん

詩人・富田碎花は、謙虚な心を持ち続けた人でした。カーペンターやホイットマンの詩の日本への紹介者として知られています。大正時代から芦屋に住み、詩作のため全国各地を旅し、長編詩「兵庫讃歌」を公にして、五十余編にのぼる校歌、市町歌を作詞するなど、その多様な文化的業績から第一回兵庫県文化賞を受賞。"兵庫県文化の父"と呼ばれました。現在公開されている富田碎花旧居は、かつて谷崎潤一郎も住んだところです。

【西国街道】



春日集会所の東にあるお地蔵さんと道標

に 西をめがす旅人も一服したか 打出浜

西国街道は古代、都と太宰府を結ぶ第一官道でした。都をでて大山崎・箕面市萱野・伊丹市昆陽・西宮市越水と南西にすすむと打出の浜に出ます。これより下関までは海路と平行しながらの道です。十六キロメートルごとに駅（官吏に馬や宿を提供）がおかれ、芦屋駅（津知町の北）もありました。江戸時代も駅伝制が復活し西国（九州）への道とよばれましたが、新しい浜街道のほうが旅人でにぎわいました。

【親王塚古墳】



親王塚古墳

い いにしへの 緑豊かに 親王さんの杜

親王塚古墳は四世紀で、九世紀の阿保親王とは時代が違いますが、早くから親王のお墓として祀られています。江戸初期に親王の子孫の毛利藩主が整備したものが直径三十六メートルの円墳で、明治以後は宮内庁の管理です。この古墳と親王を結びつけたのは、親王が芦屋と関係の深い原業平の父であったことと、古墳の名前が交通の要地にある「あお（青・粟生・阿保）」だったからでしょう。河内松原市阿保町に親王の伝説があります。

【朝日ヶ丘遺跡】



朝日ヶ丘遺跡

し 縄文の
息吹を伝える 朝日ヶ丘遺跡

芦屋に住んだ最初の人々の生活跡が朝日ヶ丘町二九番地の遺跡緑地となっています。標高五十メートルの南向き台地で、川も流れる住みよい場所です。鋭いサヌカイト製のナイフなど、旧石器時代（約一万年前まで）の石器類が出土しました。ついで、新石器時代（約一万年以後）の縄文前期の爪形文土器や石の鎌・斧などが出土し、柱穴らしい跡も見つかって、縄文遺跡の少ない阪神地域での貴重な生活跡です。

【六麓荘】



六麓荘

ろ 六麓荘
見晴らし最高 屋敷町

六麓荘は、宮川の上流に住宅地が出来始めたころの昭和四年、株式会社六麓荘が国有林の払い下げを受けて宅地造成しました。竣工は昭和六年。上・下水道、ガスだけでなく電柱、電話線も地下に埋設する画期的な試みが行われ、完全舗装した道路、遊歩道、公園、テニスコートなども備えられました。交通手段として、六麓荘乗合自動車も運転。地形を生かしたゆとりのある住宅地の当時のキャッチフレーズは「東洋一の健康地」でした。

芦屋神社周辺

【芦屋神社の歴史・だんじり】



八十塚古墳



水神社

ね 練り歩く
だんじりばやし 追いかけて

芦屋では古くから打出天神社や芦屋神社の祭りなどでだんじり巡行が行われていましたが、高度経済成長とともに価値観が多様になり、一時中断していました。しかし、心に潤いを求める機運が高まり、昭和四十八年に「山之町地車愛好会」が結成され、翌年に打出、五十年代中ほどから西之町、精道、三条でも復活しました。平成に入り「あしや秋まつり」として位置づけ、五基が市内を練り歩き、勇壮な姿を披露しています。

【八十塚古墳】

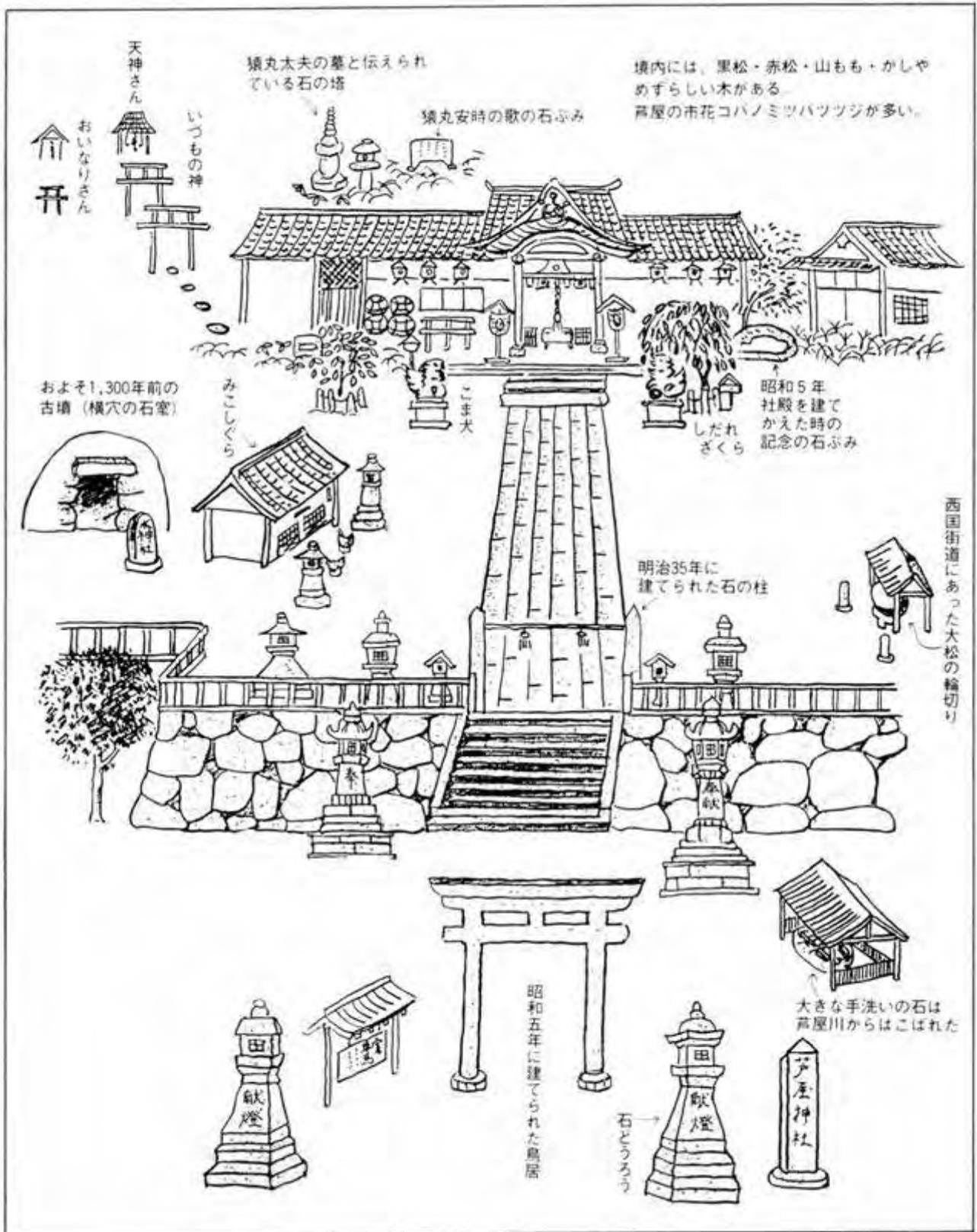
や 八十塚に
古代の庶民が 先祖をまつる

古墳時代後期（六〜七世紀）蓋石を開け、狭い通路を通って棺を置く部屋にはいる石造りの横穴式で、何度も埋葬できるお墓がひろまり、来世の生活のためお供えもしました。自立してきた庶民にもひろまり、八十塚や三条、城山古墳群のように多数の小古墳がつくられ、有力者は旭塚のように大きな石で古墳をつくりました。天井石は大阪城の石垣などに使われました。芦屋神社境内古墳は小さいが天井石も残っています。

【水神社とフカ切り岩】

ふ フカ切り岩にお供えし
水神さんに 雨乞いを

むかしから農業用水の確保は重要な問題でした。芦屋川でも水の利用をめぐる村々で争いが繰り返されてきました。とくに干ばつに苦しむと、芦屋川の上流にある弁天岩の水神さんに雨乞いをしました。しかし効果のないときは、打出沖でフカをとり、弁天岩近くのフカ切り岩で料理し、水神さんにお供えしたと伝えられています。現在、弁天岩の水神さんは芦屋神社に移され、「水神社」がまつられています。



芦屋川神社の様子

芦屋神社周辺～ 東六甲展望台

【開発と治水】

今を去ること約400年前、江戸時代のはじまりは大規模な土地開発の幕開けでもありました。元和元年（1615）5月に大坂城が夏の陣により落城したあと、元和6年（1620）には徳川氏による大坂城の大規模な修築が始まり、現在の芦屋市域からも多くの石材が切り出され、大坂へ運ばれていきました。また芦屋川流域・河口において新田の開発がすすみました。



「芦屋村差出明細帳」明和6年（1769）山村家文書
芦屋川については、その幅が往還筋で60間（約109m）、
下通りで90間（約164m）あったと記録されています。

ての村が芦屋川の水を利用し管理していました。また、芦屋川から分流する「東川用水」は現在の神戸市東灘区にあたる森村・深江村・中野村などでも利用されていました。江戸時代をつうじて、芦屋では水をめぐる争論が絶えることがありませんでしたが、それを通じて限られた水資源をいかに保全し、それを活用していくかということが考えられてきました。その一つが「番水」で各村は取水する順番と時間を決めて各村の田地へ水を引き入れ、厳重に水の管理を行ないました。

また明和6年（1769）の「芦屋村差出明細帳」には溜め池は2か所しか記載されていませんが、たび重なる水争いを解決するために芦屋村の年寄であった猿丸又左衛門安時は、六甲山中において天保12年（1841）から溜め池を開削し、約20年の歳月をかけて完成させました。これが現在の奥池で、これにより芦屋の水事情は大きく改善し、現在でも芦屋市民の飲み水の供給源として活用されています。

このような開発は全国規模で行なわれており、このことは村から程近い山や川の荒廃をもたらしました。これに対して、幕府は寛文6年（1660）に3か条からなる「諸国山川掟」という通達を出しました。これは、①川へ土砂が流出して、川の流れが悪くなっているので草木の根を掘り取ることを禁止する。②川上の山に木を植えて土砂の流出を留めること。③川筋の河原を田畑として開発することを禁止する。山中での焼畑も禁止する。という内容で、山と川の管理のあり方を基本的に定めたものでした。

江戸時代には、現在の芦屋市域に芦屋村・打出村・三条村・津知村の4か村がありましたが、これらすべて



現在の奥池のようす

左側が奥池、右側が昭和46年完成の第2奥池です。

【水と産業】

六甲山の南側の斜面では、元禄年間（1688～1704年）頃より水車が設置され始めました。そしてその後、六甲山を流れ落ちる川の水を利用した産業用の大きな水車が近・現代にいたるまで数多く稼動しました。最初の頃の水車がどのような作業に利用されていたかはよく分かりませんが、18世紀中頃以降には菜種や綿の種から油を絞ったり、酒づくりのための精米を行なっていました。菜種油は、江戸時代には灯油として利用され全国的に需要の高い商品でした。また灘の酒は江戸へ運ばれ、大変な人気を博していました。

芦屋においては、水車設置の願書は18世紀初頭のものが残されており、安政4年（1857）に作成された「芦屋川水車絵図」には芦屋川および高座川からの分流に設置された21台の水車が描かれています。また明和6年（1769）の「芦屋村差出明細帳」では、芦屋村に設置されていた11台の水車のうち、6台が「油屋稼車」、5台が「米踏粉挽車」であると記されており、水車を使って油絞りや精米が行なわれていたことがわかります。

このような水車の設置は、江戸時代の芦屋の人々の生活に大きな影響をもたらしました。水車の使用によって油を絞る効率がよくなったために原材料となる菜種が不足し、芦屋をはじめとする西摂地域で急速に菜種の生産が拡大されるようになりました。また、

幕府による菜種流通の統制に対しては、文化2年（1805）に菜種の自由な販売を求めて村々は連合して「国訴（こくそ）」と呼ばれる共同訴願を行ないました。この運動は、当初は芦屋市域の村を含む武庫郡・菟原郡74か村で始まりましたが、その後、摂津・河内の568か村へと拡大し、ついには村々の要求を幕府に認めさせました。

西摂地域における菜種油の生産は、関東において江戸時代後半よりその生産が拡大したことと明治時代に石油ランプが登場したことにより減少しましたが、明治時代以降、水車は素麺（そうめん）づくりのために小麦をひく作業や江戸時代より引き続いて酒づくりのための精米で活躍しました。

しかし、電力の普及や昭和13年の阪神大水害によって水車の多くはしだいにその姿を消していききました。



【芦屋川水車絵図】安政4年（1857）左家文書

水車のほか、芦屋村の新しい開発地が図示されており、弁財天や薬師堂など水に関係する建物が描かれています。

近年の発掘調査では、江戸時代の芦屋の水事情を物語る遺跡が確認されています。

平成3年に芦屋市大原町の打出岸造り遺跡では、江戸時代の上水道が見つかりました。これは、直径7cmの竹の節をくり抜いて樋（とい）としたものです。竹と竹との接合部分には、直径13cmの丸木に穴をあけたものを使用していました。この上水道の水は、六甲山の山すその谷から引いたものと考えられますが、城下町ではなく農村でこのような上水道が見つかることはあまりみられず、貴重な事例といえます。

また、平成17年から芦屋市山芦屋町で芦屋川水車場跡の発掘調査が行なわれ、水車に関連するいくつかの施設が見つかりました。主な遺構としては、水車場の建物に伴う柱穴、水車（水輪）が回転していた部分（滝壺）、水車に掛けられた水を排水する暗渠、水車場内の半地下式の作業場、石臼をすえた可能性がある穴などがあげられます。また出土遺物は、石臼をはじめとする石造品、土管、方柱状土製品、棒状土製品などがありました。この他、陶磁器類が数多く出土しており、年代は江戸時代後期～幕末（18～19世紀）のものでした。滝壺（水車回転溝）を構成する石材の積み方なども考慮に入れて、この水車場の建設時期は幕末（19世紀半ば）以前にさかのぼるものと考えられています。



芦屋川水車場跡発掘現場のようす

【水にまつわる伝承と信仰】

江戸時代には、水にまつわるさまざまな伝承や信仰が生まれました。現在、芦屋市西山町の「芦屋廃寺」の石碑が立つあたりには、薬師堂と呼ばれるお堂が建っていました。その様子を「芦屋村差出明細帳」は、瓦葺の屋根をもった二間半（約4.5m）四方の建物であったと伝えています。このお堂については、宝永7年（1710）に出版された観光ガイドブックである「兵庫名所記」に記載があります。それは熊野権現の神力により紀州からの潮の流れがこのお堂の下を通り有馬温泉で湧き出ており、昔は有馬温泉山の僧侶が毎月この薬師堂に参籠していたという非常に興味深いものです。同じような話が「摂陽群談」（元禄14年（1701）刊）や「摂津名所図会」（寛政8年（1796）刊）にも載せられていますので、江戸時代に広く知られていた伝承のようです。

また六甲山で鉱山の開発がすすめられようとしたときには、有馬温泉から「湯道」が断たれるとしてたびたび反対の意見が出されたことが記録に残されており、有馬温泉においても同じような伝承があったことがうかがえます。



『摂津名所図会（巻七）』寛政8年（1796）本館蔵
「薬師堂」が左側に小さく描かれています。



「ふか切り雨乞い図」
紙本著色 掛幅装
縦99.3cm 横37.9cm
天保15年（1844）鎌田家蔵

江戸時代には、日照りが続くと村人は神仏に雨が降るように祈りました。芦屋では、このような雨乞いの一つとして「ふか切り」が行なわれていました。

これは、芦屋川の上流にある「ふか切り岩」と呼ばれる長方形の大岩で行なわれました。芦屋の沖合いで大きな魚を捕まえてきて「ふか切り岩」の上で包丁を入れ、流れた血をこの岩に浴びせるものです。そうすると六甲山より黒雲が立ちのぼり、とたんに大雨になったといわれています。これは血で大岩を汚すことで水神は怒り、この汚れをはらうために雨を降らせると考えられていたからです。

現在でも芦屋市内にはこの雨乞いをとりおこなった山伏の功德をたたえるために作られた掛け軸が残されています。ここには、山伏が7日間の断食の後にこの行事にのぞんだことなどが記されており、また描かれた山伏の姿は当時の雰囲気を感じてくれます。

同じような雨乞いは六甲山周辺の生瀬村や名塩村（現西宮市）でも行なわれていたと伝えられています。



ふか切り雨乞い図（一部）

「ふか切り雨乞い図」銘文
天保五甲午年八月朔日明六ツ時
六甲山口 九拾八日てりして雨ふらず
飲水もきれ作物もそた、ず難儀に
及ふべき時鱗切岩ニをしこもり七日の
段食いたし此鱗を三日の夜ニきりつやし
其功德をもつてふと大雨ふりたまひ其功德神力也
近在村々を、いニたすかり又ハ芦屋之里打出村より此
七日之上りのちハ此先達勇徳院様と人ハ彦兵衛と申入
芦屋村へ此画預信心いたしける
天保十五甲辰春三月
法印蘭雅写（印）



ふか切り岩



弁天岩

芦有道路

芦屋市の奥山から有馬まで、一〇・六七キロメートルを二十分で結ぶ六甲山地の横断道ちゅうだん路です。車が走りやすいようにすべて路面にアスファルトがひかれています。この道路は、約三十年前に、二か年の工事で作られました。芦屋から有馬まで、九つの橋と四つのトンネルがあつて、もっとも長いのは、有馬トンネルで百七十八メートルです。

海面からの高さが、一〇〇〇メートルに近いので、見はらしがよく、大阪湾や宝塚・西宮・芦屋のまちが望まれ、まわりの深いみどりの谷のようすが見られます。



芦有道路



芦有道路からの眺め

ナウマン象の化石

いまから三十二年前の昭和三十六年三月、芦屋から有馬まで、六甲山を横断する芦有道路の工事がおこなわれていました。いまの芦有ゲートの北約百メートルにあたる道路ぎわの崖の中から、大人の手のひらぐらいの大きさの化石が見つかりました。この化石は、ナウマン象と呼ばれた象の下あごの歯であることがわかりました。

海面からの高さが四百メートルぐらいもある高い山の急な坂をどうして登ったのでしょうか。ナウマン象の化石は、日本各地で発見されています。芦屋市の近くでは大阪市・明石市・加古川市からも見つかっています。ナウマン象は、いまから約二十万年



復元されたナウマン象



ナウマン象の化石が見つかった時の様子

東六甲展望台

【奥池】

- ・ 芦屋市周辺の自然植生としては、奥池周辺のアカマツ-ハナゴケ群落、ごろごろ岳周辺のヌマガヤオーダー（湿原の植生）が現存し、「奥池周辺の湿地植物群落」は、貴重な植物群落（兵庫県版レッドデータブックA）として、県指定されています。



奥池周辺の様子

【いもり池】



サギスゲ

ひ

氷河期の
サギスゲ残る いもり池

氷河期には海面が百メートルも低下し、日本列島と大陸が陸続きとなり、芦屋で臼歯の化石が出土したナウマン象などの動物や人類が来て、北方系の植物も広がりました。「いもり池」に生えるサギスゲという植物もその一つで、現在まで「いもり池」の特殊な条件の中で生き残りました。近畿地方での自生地は九カ所しかなく、「いもり池」は日本での西限地です。白い花穂が咲くさまが白鷺が舞い降りたようなので、この名があります。

剣谷気象観測所あと

阪急バスの有馬行にのって、奥池のバス停でおりると、このあたりは海面からの高さが五百メートルほどありますので、夏でもすずしく、あたりは赤松の林にかこまれて会社の社宅や住宅が建ち、明るい風景が広がっています。

奥池のそばのユース・ホステルの建て物に向かって右の道をたどり、第二奥池から南へ通じる道を進むと、イモリ池に出ます。その東側の坂道を行くと広場に出ます。

広場の右に、鉄の骨組でささえられた、地上十七メートルになる木づくりの展望用の小屋がつくられています。「剣谷森林気象観測所」のあとで、六甲山の雨量や温度、風の方角や速さなどの調査と、山火事の見張りなどを行ったところでした。

この建て物は、いまから五十八年前の昭和十年三月に完成し、池野良之助さんという人が、二十五歳の時に、この大切な仕事につきました。その日は雪の降る寒い日でした。池野さんは、ここで三十八年間もの長い間、観測の仕事をつとめました。そのころのようすは、池野さんの「日誌」に記されています。



山火事を監視する池野さん



気象観測所跡

【大阪城の石垣】



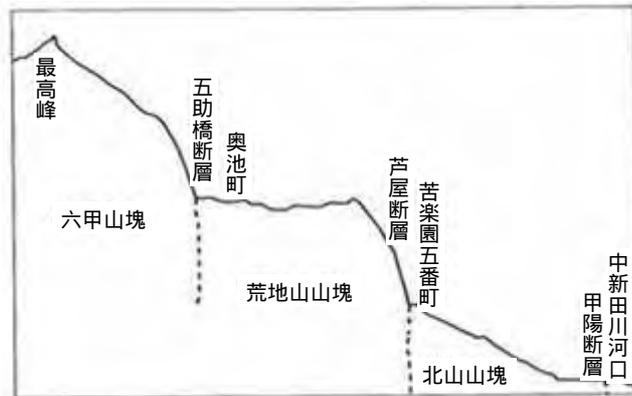
大阪城の石垣（外堀）

き

切り出し運んだ
刻印石 大阪城の石垣に

豊臣氏を滅ぼした徳川氏は、豊臣秀吉の築いた大阪城の上に新しい大阪城を築いたことがわかってきました。それまでの石垣は周辺にある石棺・石碑や自然石が中心でしたが、徳川氏は諸大名につくらせた直方形の割石で新しい大阪城を築いたのです。石の多い東六甲山系では各大名の石工が区域をきめて石を集めて割り、海岸まで出して船で運びました。石には大名の紋(㊦)松江藩、(㊧)平戸藩など)と、石工の持場の刻印があります。

【六甲変動（平坦面）】



・芦屋市では、奥池町や芦屋カントリー周辺が平坦面となっています。こうした地形は、六甲山地が断層運動の繰り返しで形成された生い立ちを物語っています。



東六甲展望台からの眺め

芦屋かるた 読み札一覧

あ	芦屋川 桜ふぶきは 絵巻のごとく	ぬ	ぬえ塚に 都荒らした 怪物が
い	いにしへの 緑豊かに 親王さんの社	ね	練り歩く だんじりばやし 追いかけて
う	打出の小槌 語り継がれて 町の名に	の	野の花を 一本ささげる 碎花さん
え	会下山で 弥生の人が いくさに備え	は	華やかに 街を彩る 芦屋マダム
お	王朝ロマン 想いをはせる 楽平橋に公光橋	ひ	氷河期の サギスグ残る イモリ池
か	窯の煙に入り日さし 色鮮やかな打出焼き	ふ	フカ切り岩にお供えし 水神さんに 雨乞いを
き	切り出し運んだ 刻印石 大阪城の石垣に	へ	平和を守る ウルトラセブン 芦屋に来たぞ
く	苦勞して 奥池拓いた 猿丸安時	ほ	ほんわかと 被災した心温め 絆強めた芦屋温泉
け	駒瀨と 芦屋舞台に 「細雪」	ま	埋蔵金 本当にあったか 金津山
こ	古老の語る 水車谷 芦屋の里の精米所	み	みみづくは ぼくらの街の 見張り番
さ	サマーカーニバル ドラゴンボートレースに 大花火	む	むかし修験者 今ハイカー 高座の滝からロックガーデンへ
し	縄文の 息吹きを伝える 朝日ヶ丘遺跡	め	めでたき風景」と 小出権重 芦屋を描く
す	すこいすこい JR 天井川をくぐり抜け	も	もとより名高い 黒松並木 今もなお
せ	世界もびっくり 前衛のパワー爆発 具体の美	や	八十塚に 古代の庶民が 先祖をまつる
そ	それぞれの 個性あふれる ケーキ屋さん	ゆ	俗衣着て 金魚すくった 三八通りの夜店懐かし
た	鷹尾城 松若丸いやす コバノミツバツツジ	よ	よし笛の 音色競った呉川の 幼い頃の蜻蛉つり
ち	ちよつと休憩 おしゃれな街の おしゃれなカフェで	ら	ライトの設計 緑にとけこむ 旧山邑家住宅
つ	月若公園 句碑に見る 虚子三代	り	臨港線の 南に広がる ニュータウン
て	「ててかむいわし いらんかえ」魚売りの声 今いずこ	る	るり色のかませみ遊び ほたる舞う ふるさとの川
と	突然の災害 教訓生かして 防災準備	れ	歴史をたどる散歩道 親王寺から 茶屋芦屋
な	なみださそう あしやおとめは 万葉の歌に	ろ	六麓荘 見晴らし最高 屋敷町
に	西をめざす旅人も 一服したか 打出浜	わ	わずれない 1・17 いつまでも

芦屋かるた 作者一覧

(敬称略)

絵札作者			読み札作者			
荒川 宗佑	岩園小学校	5年	稲本 文子	芦屋市呉川町	芦屋聖徳園「イビ」センター	芦屋市六麓荘町
井上 かずあき	精道小学校	2年	井上 弘子	芦屋市山芦屋町	大西 穂比子	芦屋市浜町
岩塚 宏亮	打出浜小学校	6年	衣斐 知代	西宮市殿山町	岸田 鈴子	芦屋市月若町
小川 遥	岩園小学校	5年	大西 理華	芦屋市岩園町	小松 久仁子	芦屋市新浜町
奥内 一美	打出浜小学校	6年	古畑 あやか	芦屋市松浜町	山東 允	芦屋市竹園町
菊地 明日香	打出浜小学校	6年	古畑 翔	芦屋市松浜町	須賀 知子	芦屋市川西町
小池 美帆	朝日ヶ丘小学校	5年	佐中 靖代	芦屋市東芦屋町	高橋 叔子	芦屋市南宮町
五郎丸 拓也	宮川小学校	5年	新宮領 樹	芦屋市親王塚町	高橋 奈千	浦安市
白川 みゆき	潮見小学校	6年	杉本 善夫	芦屋市翠ヶ丘町	高橋 広美	芦屋市若宮町
竹川 まり	打出浜小学校	6年	高橋 勇	芦屋市若宮町	田中 啓三	西宮市鶯谷町
多田 英恵	朝日ヶ丘小学校	5年	高橋 広美	芦屋市若宮町	榎 豊隆	芦屋市東山町
谷川 雅恵	精道小学校	2年	高橋 淳	芦屋市若宮町	武田 正道	芦屋市高浜町
辻 魁	朝日ヶ丘小学校	5年	高橋 恵	芦屋市若宮町	戸田 真由美	神戸市長田区
丹羽 えり花	精道小学校	2年	武田 正道	芦屋市高浜町	永井 喜代子	芦屋市茶屋之町
深見 奈津巳	岩園小学校	5年	永井 喜代子	芦屋市平田町	元浦 操	芦屋市三条町
藤川 はな	宮川小学校	1年	中村 智恵子	芦屋市楠町	山田 富田郎	芦屋市大原町
藤原 百絵	精道小学校	6年	西嶋 義隆	神戸市兵庫区	山中 健	芦屋市春日町
古川 達巳	朝日ヶ丘小学校	4年	藤田 佐紀子	芦屋市西蔵町	若宮 芳男	芦屋市呉川町
村上 高耶	浜風小学校	3年	横村 啓吾	芦屋市三条南町	和田 映子	神戸市
森田 朝子	精道小学校	2年	山中 健	芦屋市春日町	箱	
山本 有紀子	宮川小学校	5年	吉永 公俊	芦屋市浜町	題字 近藤 朱鳳	
葦本 未織	打出浜小学校	6年			写真 西本 佳子	

解説：岩本 昌三 小田 博 栗田 洋子 古市 景一 山村 悦三

平成17年1月

協力：まち・コミュニケーション御蔵・芦屋市立美術博物館・芦屋市商工会

後援：芦屋市・芦屋市教育委員会 阪神南地域づくり活動応援事業

発行：芦屋かるた制作委員会

事務局：集・空・間T i o ティオ

〒659-0067 芦屋市茶屋之町7-12

tel: 0797-25-0177 fax: 0797-31-9061

ホームページ <http://www1.ocn.jp/~tio/>

出典資料：「芦屋かるた」（芦屋かるた制作委員会）

「水と芦屋 - 江戸時代のエコロジ -」（芦屋市立美術博物館）

「あしや子ども風土記 歴史さんぽ」（芦屋市文化振興財団）など